

銭形平次捕物控

仏敵

野村胡堂

青空文庫

不動明王の木像が、その右手に持った降魔げこうまの利剣りけんで、金貸叶屋かのうや重三郎を突き殺したという、江戸開府以来の大騒ぎがありました。

八百八町には、その日のうちに呼び売りの瓦版かわらばんが飛んで、街々の髪結床や井戸端は、その噂うわさで持ちきった日の夕景、——銭形平次のところに相変らずガラツ八の八五郎が、この情報を持ち込んで来たのです。

「こいつは驚くでしょう。誰がなんと言つたつて、運慶うんけいとか湛慶たんけいとかの作といわれるあらたかな不動明王様が、金貸を殺したんですぜ——銭形の平次親分が夫婦連れで来たつて外に下手人げしゆにんがあるわけはねエ——」

「待つてくれよ、八。俺は御存じの通り岡つ引だが、女房には十手捕縄を持たせた覚えはねエぜ。銭形平次が夫婦づれで——なんてえのは気になるぜ」

平次は白い額を挙げて苦笑しました。

「物の譬たとえですよ。ね、親分。そうでしょう。叶屋の重三郎は谷中やなかの鬼と言われた人間だ

が、金がうんとあつて用心深いから、二た間続きの離屋はなれには、女房のお徳も寄せつけね工。貸金の抵当に取つた不動様とたつた二人、戸にも障子にも嚴重に棧さんをおろして、中でそつと殺されていたんですぜ。下手人が障子の隙間すきまから煙のように入つたんでなきや、隣の部屋に置いてあつた、不動様の仕業しわざに違いありませんよ」

八五郎は一生懸命にまくし立てるのでした。事件の怪奇性を強調して、とかく不精な親分の平次を動かそうというのでしよう。

「それほどよく分つているなら、お前の手で不動様を縛つて来るがいい。あわてて帰つて来て、どうしようてんだ」

平次はせめてこんな事件でも、八五郎の手柄にさしてやりたいと思う様子です。

「ところが、そんなわけには行きませんよ。叶屋重三郎が慾に目が眩くらんで、もつたいたなくも不動明王の尊像を抵当に取つたから、仏罰が当つたに違ちがえねえといふので、不動堂の講中が、浪人くずれの大垣村右衛門を先頭に、叶屋に乗り込んで、お祭のような騒さわぎですぜ。うっかり不動様を縛るような顔でもしようものなら、請ひ合ぎい袋叩ひきにされる——」

八五郎の仕方しかたはばなし次第に熱を帯びて、平次もツイ膝ひざを乗出さずにはいられなかつたのです。

「面白そうだな。もう少し順序を立てて、詳しく話してくれ。朝っから現場を掻き廻したんだから、少しは筋が通るだろう」

「筋が通り過ぎて困っているんで」

「へエ？」

「叶屋重三郎は、谷中三崎町で、寺方と御家人を相手に因業な金貸を始め、鬼とか蛇とか言われながら、この十二三年の間に、何万両という身上を拵えたのは、親分も知っていなさる通りだ——」

「そんなことは端折ってもいいよ」

「だんだん慾の皮が突つ張つて、谷中の不動堂の堂守、海念坊に三十両の金を貸したのが、三年経たないうちに利に利が積つて百両になった。海念坊は不動堂を修覆するとき、講中の金の寄りが悪いので、ツイ高利と知りながら借りた金だが、大口の寄付の当てが外れて、今ではどうすることもできない」

「フーム」

「そのうち、不動堂の本尊が運慶とか湛慶とかの作で、望み手があれば千両にもなると教えるものがあつて、叶屋重三郎は証文を楯に不動堂に押しかけ、海念坊が額を敷石に叩き、

血の涙で頼むのも聴かず、とうとう本尊の不動明王を、自分の家へ持って来てしまった、——これが今から三日前」

「ひどいことをする野郎だな」

平次もなんとなくカツと血の湧くのを感じました。

「不動堂の堂守の海念坊は講中へ申し訳が立たないと言って、翌朝堂の中で首を吊つて死んでしまいましたよ、可哀想に」

「身寄りはないのか」

「ありません。——たった一人の甥の千代松が、叶屋に奉公しているだけ——」

「変な廻り合せじゃないか」

「千代松は一番先に怪しいと思われたが、こいつは女の子のような優しい男で、人間などを殺せそうもない——その上昨夜は不動堂の叔父のお通夜をしていた」

「それからどうした」

平次はいよいよ本腰になりました。

叶屋重三郎は不動様を持込んで、廊下つづぎの離屋に寝た三日目の朝、いつもの早起きに似ず、辰刻いつつ（八時）過ぎになつても起きて来なかつたので、気に入りの下女のお仲が二度も三度も廊下から呼んでみましたが、なんの返事もなければかりでなく、障子は内から棧さんがおりて押せども引けども動きません。

それから家中の騒ぎになつて、女房のお徳、娘のお雛ひな、番頭の孫六、それにお仲が加わつて四人、障子を外から押破つて入りました。が、雨戸の隙間漏る朝の光の中に――。中はまさに血の海です。

手前の八畳に床を敷いて寝ていた主人の重三郎は、頸くびのあたりを一と突きにやられ、床から抜け出し加減に血潮の中に絆切こしきれ、境の唐紙を開けた次の長四畳には、薄暗い中に据えられた不動明王の木像が、赫怒かくどの面相物凄く、ジツとそれを見下ろしているのです。おどろいて死骸を抱き起したお徳とお雛。

その間に番頭の孫六と下女のお仲は、雨戸と窓を開けました。孫六は雨戸を、お仲は二つの窓を――。後でガラツ八が訊いたことですが、雨戸は棧さんがおりている上に心張棒が厳重に締められ、窓――北向きの二つの窓は、四畳の方は華奢きゃしゃながら格子がある上に棧さんが

おり、八畳の方の丸窓は、格子はありませんが、上下の棧がおりて掛金までかかり、この上もなく念入りに締めてあったということです。

四人の声を聴いて、店からも多勢の人が駆けつけました。何よりも人々を驚かしたのは、離屋の二つの部屋が嚴重に締められているのに、叶屋重三郎は明らかに人手に掛つて殺されておられ、隣室との境の唐紙は開けられて、不動明王の劔が、もったいなくも碧血へきけつに染んでいることだったのです。

木で彫つて箔はくを置いた不動様の劔で人間一人突き殺せるはずもないのですが、箱のように密閉された部屋には、外に兇器というものは一つもなく、人間の隠れる場所などありません。第一、目ざとひのが自慢の重三郎が、床の中に寝たまま喉笛をかき切られているのも不思議です。

時を移さず御用聞千駄木の菊松は飛んで来ました。が、この有様では手の下しようもなく、その間にガラツ八の八五郎が小耳に挟んで検屍けんし前に駆けつけましたが、これとても不動明王に睨にらみすくめられて、空むなしく引揚げる始末です。

「なるほどそいつは變つてゐるが、ちよいと當つてみた具合でこいつは臭いな——と思つたことはないのか」

平次はガラツ八の長談義が終るのを待つて、こう訊ねました。

「臭い奴だらけですよ。臭くないのは娘のお雛と、下女のお仲と、飯炊きのお三ぐらいのもので——」

「その三人だけが若くて綺麗だろう」

「冗談でしょう。お三なんと来た日にや、人七化三で」

「人三化七の間違いじゃあるまいね」

「へッ。お三はまだ人間らしいところが多い方で——ニツと笑うととんだ可愛らしいところもあるが、娘のお雛と来た日にや——」

「お雛はどうしたんだ」

「あれが本当の人三化七でさ——親の因果が子に報い、という代物」

「おかめかい」

「親は代々猫人なら、鳥娘か轆轤首だが、鬼の重三郎の娘だけに、こいつは島田に結つた赤鬼ですよ」

「そんなに見つともないのか」

「それから下女のお仲は大変ですぜ」

「それは青鬼かい」

「とんでもない。山下にも湯島にも、岡場所なんかには、あんな玉はありませんぜ。ピカピカするような年増で」

「それほどの容貌きりようが、なんだって鬼の重三郎のところに奉公なんかしているんだ」

「重三郎が金づくで手に入れて、別に困うつもりだったが、恐ろしく固い女で、身を切り刻んでも父親の借りた金は返すから、ただの奉公人を使ってくれという望みで、本宅へ入って下女代りに働いていたんだそうですよ」

ガラツ八はすっかりお仲間びいき鼻屑びいきになつた様子です。

三

「ところで怪しいのは誰と誰だ」

平次はガラツ八を試験するというよりは、自分の燃え立つ興味に引摺られるように、こ
う水を向けました。

「まず第一番に女房のお徳」

「フム」

「こいつは三十八九の火箸ひばしのように瘦せた女だが、信心に凝ってしまつて、主人の重三郎とはどうしても馬が合わねエ」

「なんの信心だ」

「恐ろしく調法にできた女で、流行はやりものなら何でも信心する。一としきり笠守かさもり稲荷いなり様に凝っていたが、その次は巫女みこの口寄せに凝つて、円山のお穴様に凝つて、近頃は近所の不動堂に日参だ。あんなのは鰯いわしの頭だつて、お玉杓子たまじやくしの尻尾だつて、流行りさえすれば有難くなる奴ですよ」

「主人は黙つて見ているのか」

「黙つていないから喧嘩になるんでしょう。重三郎から見ると信心は物入りだから、何べんも止めさせようとしたが、どうしても聴かねエ。もつともお徳は家付きで、重三郎の方が入婿だから、ひどく叱ると、お前の方が出て行け——と亭主へ喰つてかかるんだそうですよ」

「それから」

「隣に住んでいる浪人者の大垣村右衛門、こいつは五十を越した冬瓜とうがんのような男だが、

不動堂の講中の世話人で、不断から叶屋重三郎を仏敵だと言いつらしている。あんなのはきつと仏様の罰で非業ひごうの最期を遂げるに違いない。もしも仏様が寛大でいつまでも放っておくなら、他ならぬこの大垣村右衛門が成敗してやる——って言っていたんだそうで」

「少し物騒だな」

「三番目は番頭の孫六、これも五十近くせに、道楽がひどいから借金だらけ、帳面だつてどう誤魔化ごまかしているかわかったものじゃありません」

「それつきりか」

「まだありますよ、——手代の千代松、——こいつは一番怪しい。不動堂の堂守——二日前に首を縊くつて死んだ海念坊の甥おいで、主人重三郎はいわば叔父かたきの敵だ」

「フーム」

「こいつが名乗つて、敵を討つたとしたら、どうなります？ 親分、——叔父の敵はとりも直さず主人だ。敵討で褒められるか、主殺しで磔はりつけ刑になるか。褒められたり、磔刑になつたりじゃ、千代松だつて面喰らう」

「とりも直さずと来たか、馬鹿だなア、——それからどうした」

「それつきりですよ。不動様を縛つたものか、千代松に褒美をやったものか。それとも——」

「ガラツ八の話は相変らず調子が外れます。

「止よさないか、馬鹿馬鹿しい。とにかく恐ろしく変った殺しだ。ちよつと覗いてみようか」
 「有難え、親分が乗出しや千人力だ。千駄木の菊松なんか指図がましい顔をされないだ
 けでも助かる」

「指図されたつて不足はあるめえ。菊松は顔の古い御用聞だ」

銭形の平次もとうとう御輿みこしをあげる気になったのも無理はありません。それほどこの凶
 敵殺しは変っていたのです。

谷中やなか三崎町へ着いたのは、もう薄暗くなつてからでした。町内付合いもろくない叶屋
 では、通夜なども至つて淋しく、店中の者に親類が二三人、それにお徳とお雛が加わつて、
 何かしら上うわの空の速夜たいやが営まれております。

「人間が死んでも、これくらい人様になんとも思われたいのはキビキビしているじゃあり
 ませんか。ね、親分」

愁歎とはおよそ縁の遠い、そろぞらしい空気を見ると、ガラツ八は遠慮のない調子でや
 ります。

「黙っている」

平次はそれをたしなめながら、遠慮してお勝手口へ顔を出しました。

「まあ」

中腰になって何か仕事をしながら、灯あかりいっぱいに振り仰いだのは、ガラツ八が人七化三と言った飯炊きのお三でしょう。不安らしく見張った大きい眼、霜焼けのした赤い頬、少し仰向いた低い鼻、綺麗でないことに論はありませんが、どこか明けつ放しで、正直そう
で、憎めないところのある二十歳くらいの娘です。

「親分さん方じゃないの。お通しするものよ、お三さん」

そう言つて後ろから覗いたのは、二十四五の年増、これはまた抜群の美しさで、滴したたる魅力
力を汚な作りで殺したといった女——たぶん評判の下女お仲でしょう。

四

女房のお徳はガラツ八が言った火箸のような細い冷たい身体に、燃え立つような狂信者の情熱を持った四十近い女で、思い詰めたら随分ひどいことでもやり兼ねない気性らしく、

夫重三郎の非業の死を、仏罰と思い込んだものか、さして悲しむ様子もなく、二人を離屋はなれに案内しました。

「この始末ですよ、親分。——貸した金の代りにもつたいない不動様を取るなんて、そんな非道なことをしないようになって、あれほど言ったのに聴かなかったものですから」

そう言いながらお徳は、さすがに線香を焚たきながら、棺の中の——生きているうちは、はなはだ仲のよくなかった夫重三郎の死骸に意見でもするように、愚痴つぶやつぽく、つぶやくのでした。

「お前さんは、やつぱり不動様の罰だと思い込んでいるんだね」

平次は静かに問いました。

「不断が不断ですから、それでも思わなきや——」

女房は白い眼で平次を見上げながら続けました。

「——あの人は信心というものを大嫌いで、念仏一つ、お題目一つ称えたこともない人でした。その上、私の信心への当てつけもあつたでしょうが、あらたかな仏様まで抵当に取って、無理にさらって来るような人ですもの——」

「外に主人を殺すような者はいないのかえ」

「いえ、主人は多勢の人に怨まれておりました。世間並の殺されようなら、私も下手人は他にあるかも知れないと思いますが、中から締めきった箱のような部屋の中で殺されていたんでは——」

女房は世にも痛々しい表情をします。

「夜中にそつと忍んで来て、主人を殺した上、何かうまい工夫で障子を締め、外から棧をおろして、そつと引揚げたかも知れないじゃないか」

平次はそんなことを考えていたのです。

「障子の棧は外からおろす工夫はありませんよ。それに廊下の向うは私の部屋で、その前を通らなければ、ここへ来る道はありません。私は自分でも困るほど目ざとい上、昨夜は疝が昂ぶつて暁方までまんじりともしなかつたんですもの」

そういうえば、このヒステリックな中年女の寢室の前を、いかなる忍術使いも、無事に通れそうもないことは、平次にもよく呑込めます。

「すると？」

「やはり仏様の罰ですよ。あの通り」

女房は隣の部屋との境の唐紙を開けました。そこには不動尊像は昨晚のまま、前に台を

置き、供物の山を積み、灯明をかけ並べて、主人の霊前などとは比較にもならぬほど賑やかに飾り立て、護摩の煙が濛々と狭い部屋に立ちこめているのです。

朝からの講中の人たちの騒ぎや女房の凝りようなどが一と目で判るようで、平次と八五郎は思わず顔を見合せたものです。

「お、宝剣の血はそのままにしてあるのかい」

平次はさすがにギョツとした様子です。尊い仏像の剣に碧血の斑々たるのは、あまりにも冒瀆的で、結構な心持にはなれません。

「こいつはまた良い売物になりますぞ親分、——不動様が仏敵を刺し殺したとなると、賽銭がうんと」

「止さないか、八」

平次はその口を塞ぎました。

「でも、親分、ひどく血のついてるのは、剣の途中からで、尖端には少しもついていないのは変じやありませんか。死骸の咽喉の傷は、刃物で突いたんですぜ」

「それに気がつきや確かだ。不動様に罪をなすつた野郎は今頃はニヤニヤしているかも知れないが。とんだお笑い種だ」

女房がいなくなると、平次はガラツ八の耳にこう囁くささやのでした。

「そうでしよう、ね、親分。不動様や観音様が人殺しをした日にや、うっかり信心詣りもできない」

「戸締りの様子を聴きたい。番頭を呼んで来てくれ」

「へエ——」

ガラツ八が飛んで行くと、間もなく少し月さかやき代の光沢つやのよくなった野狐のような感じのする男をつれて来ました。

「お前は番頭だね」

と平次。

「へエ、孫六と申します」

「何年くらい奉公しているんだ」

「十二年になります」

「その前は」

「いろいろのことをいたしました。へエ」

「かなり借金があるというじゃないか」

「へエ」

「店の金をどれくらい費い込んでいるんだ」

平次の問いは恐ろしく無遠慮で露骨でした。

「恐れ入ります」

孫六は三つ四つ続けざまにお辞儀をしました。恥を知らない人間に特色的な媚こびを含んだ態度です。

「主人はその不始末を知っていたのか」

「薄々は御存じでしたよ。へエ」

そう言いながら、よく光る額を逆手で撫なで上げるのでした。こんな商売では腕のある冷酷な番頭は少々くらいの不都合があつても掛け替えがなかつたのでしよう。

「この離屋はなれはたいそう戸締りが良いようだな」

平次は質問の題目をグイと替えます。

「主人の自慢でございました。——こんな商売をしていると、戸締りより外に頼るものはいけません」

「戸締りは誰がするんだ」

「主人が自分でやりました。人にまかせるような主人ではございません。ゆうべはお嬢さんが雨戸と窓を締めるのを確かに見届けていなすったそうです」

「フーム」

平次は空耳を聴きながら、自分の手で戸を一枚一枚繰って見たり棧をおろしたり、心張りや掛金をかけてみたりしました。

その中でも平次を驚かしたのは、廊下からの入口の障子二枚に、いちいち棧のあったことです。

「こいつは大名屋敷の女部屋にあるという話は聴いたが、しもしも下々でこんな仕掛けを見たのは初めてだよ。この棧をおろしておく、外からは障子を破りでもしなければ、まず開ける工夫はあるまいな」

「するとやはり不動様の仕業でしょうか、親分」

番頭の孫六はキナ臭い顔をするのでした。

「馬鹿なことを言え」

「でも——」

「中から締めきった部屋へ、どうして下手人が入ったか不思議だというんだらう」

「そうですよ」

「窓から入ったのさ、教えてやろう。——その丸窓だ」

「隙間すきまからもぐって入ったんで？」

「こんどはガラツ八の方が仰天しました。」

「風じゃあるめえし、——主人の重三郎に開けさせて入ったのさ」

「誰ですその野郎は？」

ガラツ八はキツとなりました。その辺にマゴマゴしていたら、いきなり十手を振りかぶって飛びかかるつもりだったでしょう。

「主人が自分で丸窓を開けて下手人を入れたと判らなきやあ——番頭さん、お前さんが一番怪しかったんだぜ」

「へエ——」

五

「窓の外に足跡くらいは残っているかも知れない。明日の朝でも明るいとこでよく見る

がいい。——あの寝つきの悪そうな、ピリピリしているお内儀さんの部屋の前を通って、廊下の方から曲くせもの者が来る気遣いはないから、窓から入る外に道はない。縁側の雨戸も、意地悪くガラガラ鳴るから、ここも忍ぶ者には鬼門だ。——四畳の方の窓には細いけれども格子が打つてある。その格子を外はずした様子もないから、曲者が入ったとすれば丸窓の外にはない」

平次はなんの躊躇ちゆうちよもなく曲者が入った丸窓を指すのです。強大な自信です。

「へエ——」

「その丸窓は宵に一度締めている。娘が見ていたそうだから間違いはあるまい。——ところで番頭さん、今朝ここを開けたのは誰だい」

「お仲でございます。私は雨戸の方を開けました」

「そのとき確かに締っていたんだね」

「棧が渋くて、しばらくガチャガチャやっていたようですから間違いはございません。——なんでしたら、お仲を呼びましょうか」

「いや、それにも及ぶまいよ。——それより、そこに立っているお嬢さんに入って貰おうか。番頭さんはもういい」

「へエ」

ホツとした様子で立去る番頭を見送つて、

「あの野郎じゃありませんか、親分」

ガラツ八は囁くのでした。

「いや違う。番頭はよくない人間だが、その性根を主人はよく見定めている。夜中にそつと呼入れるはずはない。——ね、お嬢さん」

「……………」

立聴きしたのを指摘されて、いかにも間が悪そうに、娘のお雛が入つて来ました。

十八の娘盛りを、これはまた気の毒な醜さです。ガラツ八が人三化七と言つたのもまんならぬ。ざらの形容ではありません。

「お嬢さんのためには親の仇だ、知つてゐることはみんな言つて貰わなきゃならぬエ。いつたい誰があんなことをしたと思ひます」

平次は打ち解けた態度で膝を進めました。

「判つてゐるじゃありませんか、父さんを一番怨んでゐる者——」

「一番怨んでゐる者という」と

「……………」

お雛は黙ってしまいました。これ以上問い詰めたら、何を言い出すかわかりませんが、それは言いたくない様子でもあります。

「八、手代の千代松を呼んで来てくれ」

「へエ」

ガラツ八は間もなく二十三四の青白い男をつれて来ました。恐怖と疑懼ぎくとにさいなまれて、腹の底から顫ふるえている様子です。

「お前は昨夜どこにいたんだ」

「不動堂でお通夜をしていました。——それはみんな知っております」

「外へは出なかつたのか」

「どこへも出ませんよ」

千代松の答えを聴くまでもなく、ガラツ八はもう外へ飛び出しておりました。お通夜の席からそつと脱け出して、人を殺した例を知っているので、早くも親分の目配せを読んだのです。

「叔父さんが死んで、口惜くやしかったらうな」

「それはもう。でも、私にはどうすることもできません」

「お前はただの奉公人か」

「？」

「給料は貰っているだろうな」

「いえ、この店で給料を貰っているのは、番頭さんだけです。私も、お仲どんも、お三も、親の借金のために、給金なしで働いております」

千代松の眼には痛々しくも怨ずる色があります。いつの間にやらお雛は、耳を塞ぐように出て行ってしまいました。

「あの娘の婿は決っているのか」

平次はその後ろ姿を見送りながら訊ねます。

「いえ」

千代松は妙に擦ったく頭を振りしました。この男も婿に望まれた一人だったかもわかりません。

「隣の御浪人が、殺された主人をたいそう怨んでいたというではないか」

「え、昔は二本差した人ですから、今は手内職をしていても気の荒い人です。——でもあ

の人が下手人じゃありません。昨夜はやはり不動堂から一と足も出なかつたんです」

そう言われると、千代松と大垣村右衛門は疑いの外へ逸脱してしまします。

間もなく帰つて来た八五郎も、この現場アリバイ不在を裏書きしました。千代松と村右衛門が不動堂の通夜席から一步も出なかつたことは、二人がお互に証明し合うばかりでなく、多数の人もよく知っていたのです。

「さア判らない」

錢形平次も、このとき初めて腕こまぬを拱こまぬきました。

「やはり不動様で？ 親分」

「いや、不動様でないことは確かだ。あの木剣で人を殺せるわけではない。——が、入つた場所が判つても、曲者が出た場所の判らないのは驚いたよ」

「？」

「——重三郎が丸窓を開けて下手人を離屋の中へ入れた。——曲者は重三郎を殺して外へ出た。——後を誰が締めたんだ」

「不動様でなきや、殺された重三郎でしょう」

ガラツ八はまたとんでもないことを言い出しました。

六

「八、相手は容易ならぬ人間だ。下つ引を五六人集めて、叶^{かのう}屋^やの奉公人の身許をみんな洗ってくれ」

平次もよくよく手に余った様子です。

「そんなことはわけありません」

「さてさて、お前はここにいた方がいい。奉公人の身許洗いは、千駄木の菊松親分に頼むんだ。それから叶屋を怨んでいる者をみんな当ってみるんだ」

「あつしは？ 親分」

「奉公人たちの荷物を見せて貰え。それから重三郎を殺した刃物がなきやならない。奉公人のうちで刃物を持っていた奴はなかったか。お勝手の出刃庖丁でもなくなっちゃいないか。よく訊いてくれ。——下手人はこの家の者だ。塀が高くて外から入って来た様子もない」

平次の命令は隅から隅まで行届きました。ちょうど来合せた千駄木の菊松に頼んで、八

方に下つ引を走らせ、平次はガラツ八と菊松に手伝わせて、奉公人の荷物から、縁の下、物置の隅、下水の中までも捜したのです。

が、しかしそれも全く徒労におわりました。亥刻（十時）過ぎになって判ったことは、下女のお仲が思いのほか文字のあつたことと、飯炊きのお三が、ひどく小遣にまで困つていたことと、二人とも親の位牌いはいを持つていたことと、番頭の孫六はひどい借金に苦しんでいたことと、手代の千代松は年上の下女お仲に好意を持つていたことなどが判つただけです。

「親分、ありましたぜ」

ガラツ八は頭の上に何か振りかぶりながら飛んで来ました。

「なんだ八、騒々しいじゃないか」

「土竈へつついの中を覗くとこれがありましたよ」

「ヒ首あいくちの鞆さやじゃないか」

大方は焼け尽したヒ首の鞆を八五郎は鬼の首でも取つたように振り廻すのです。

「鞆があるくらいなら、その辺に中身だつてあるだろう」

平次がお勝手へ飛んで行くと、ほんの煙草二三服の間に血染めのヒ首を捜し出してしま

いました。それは同じ土竈へつだいの土の割れ目に、奥深く押し込んであったのを、平次は少しばかりの土のこぼれているのからたぐり出したのです。

「さア、大變、いよいよ下手人は人間に決ったぞ」

少しばかりはしやくガラツ八。

「こいつは誰の品だか店中の者に訊いてくれ」

それは菊松が受持ちました。家中の者を虱しらみつぶ潰つぶしに訊いて廻って、とうとう娘のお雛の口からお仲の持物ではないかという暗示を引出したのです。

「あ、やはりあの女だ」

平次が何やら思い当った様子で振り仰ぐと、気の早いガラツ八は、お勝手へ飛んで行って、その辺でまごまごしている美しい下女の、お仲の腕を掴つかんで引つ立てて来ました。

「えッ太え女だ、来やがれ」

引据えられて、離屋の縁側に少し灯に疎うとく崩折くずおれたお仲は、見る影もない身みなり扮ながら、この家一パイを明るくするような、不思議な爽さわやかさと、魅力を発散しているのです。

「八、手荒なことをするな」

平次は八五郎をたしなめて、お仲の俯向うつむいた顔を差しのぞきました。

「だって親分」

「短刀はこの女の持物でも、主人を殺したのはこの女とは限るまい。なア、お仲」

「え、その通りです。——短刀は私の品に相違ございません。——父親の形見ですものでも、旦那様を殺したのは私ではありません」

お仲は静かに顔を挙げました。

「それじゃ、今朝なんだつて丸窓を締めた」

平次の問いは爆撃的でした。

「えッ」

「隠すな、お仲。けさ四人で離屋へ飛び込んだとき、丸窓だけは開いていたはずだ。——いや締つてはいたが、さん棧もおりず、掛金も掛つてはいなかった。番頭の孫六が雨戸を開けるうち、——お内儀と娘が死骸に取とりすが継つっているうち、お前はガチャガチャやりながら丸窓を開けた」

「……………」

「締つてもない丸窓を、いかにも締つているように見せかけながら開けた。——あれはど
ういうわけだ」

「……………」

「隠すな、——俺にはよく判っている。不動様が人を殺すわけではない。主人を殺した曲者はどこからか出たに違いないが、障子も窓も締っていた。——そのうちどこか一箇所だけは開いていたはずだ。障子ではない、雨戸でもない、あいつはガラガラ恐ろしい音を立てるから、曲者はあんなところから入るはずも出るはずもない。——すると丸窓の他には出入口はないことになる。現に丸窓の外は足跡を搔き消した様子で、土が新しくなっている」

「……………」

「今朝その丸窓を開けたのはお前だ。こいつは金輪際間違いはない。ゆうべ主人が自分で丸窓を開けて中へ入れてやった人間も、お前の他にはないはずだ」

平次の論告は峻烈しゅんれつで一步も仮借かしゃくしません。

「いえ、いえ違います」

お仲は必死の顔を挙げました。美しくも香ばしい顔です。

「いや違わない。曲者の出入口は丸窓の他にない。その丸窓へ今朝さいしよに手を掛けたのはお前だ。——そのうえ血染の匕首もある」

「いえいえ違います。——今朝開いていた丸窓をいちど締めてまた開けたのは、それは私

です。悪いことをいたしました、そうするより外ほかはなかつたのです。——でもゆうべ丸窓から入ったのも、主人を殺したのも、私ではごぎいませぬ。私は本当に幾度も殺そうと思ひました。死んだ父親の少しばかりの借りのために、こう身体まで縛られて、いやなことばかり言われるのですもの。でも私には殺すことはできなかつたのです」

「それでは誰だ」

「それは判りませぬ」

「そんなはずはない。ゆうべ離屋へ忍んで来て、丸窓から入れて貰つたのは、お前の他に
あるはずはない」

平次は容赦しませんでした。が、お仲も頑がんとしてそれに屈しなかつたばかりでなく、
たも大変なことを言い出したのです。

「旦那様は——昨夜、夜中に丸窓を開けておくから来いと言いました。一人で忍んで来た
ら、父親の入れた証文を返してやるとも言いました。——でも私は、そんなことを聴くは
ずもありません。そんな目に逢うくらいなら、淵ふち川かわへ身を投げて死ぬか、一生奉公して
も借金を返します。でも主人はいくどもいくども念を押して、丸窓はきつと開けておく、
その気になつたら忍んで来い——と言いました」

「それを誰も聴いてはいなかったか」

「……………」

事件は次第に光明を点じて行きますが、まだ奥の奥がありそうです。

七

そのとき帰つて来た菊松の下っ引は、重三郎に怨みを持つ者の名前や、奉公人たちの身許をいちいち報告しました。中でちよつと注意をひいたのは、飯炊きのお三の父親は、根津の大工で、重三郎に借りた金のことから、二年前大川へ身を投げて死に、お三はその借金^なを済し崩しに払うために、給料のない一生奉公をさせられるのだということでした。

でも、あんなに醜いお三が、重三郎の誘惑を受けるはずもなく、それに、あの人の好い笑顔を見ると、あらゆる疑いはけし飛んでしまいます。

「お仲、お前は誰かを庇^{かば}つてはいないか」

「いえ」

平次は改めてお仲に訊ねました。

「お前と主人の話を立聴きして、開けておいた丸窓から、そつと入って主人を殺したのは、手代の千代松かも知れないと、お前は思っているだろう。——それなら安心するがいい。

千代松はゆうべ不動堂から一と足も出なかつたし、丸窓から男が入って来たのを重三郎が黙っているはずはない。——それに千代松なら、お前の持物のヒあいくち首で、主人を殺すはずはない。お前に迷惑をさせるのは、千代松の本意ではないはずだ」

「本当ですか、親分」

そう言つて振り仰いだお仲の顔は、初めて明るくなりました。千代松に疑いのかかるのを、一生懸命で防いでいた様子です。

「親分。た、大変ですぜ」

ガラツ八が飛んで来ました。

「なんだ、八」

「逃げ出しましたよ、あの女が」

「お三が逃げ出したというんだろう。放っておけ、放っておけ。俺は先刻さつきから気がついていたんだ。お仲が口を割つたら逃げ出すつもりで、仕度をしているのを知らずにいるものか」

平次は驚く様子もありません。

「すると？」

「重三郎を殺したのは、あのお三だよ。親の敵かたきを討つ気だったんだ。主人とお仲の話を聴いて、お仲が離屋へ行かないことを百も承知のお三は、お仲の着物を着て、手拭か何かで顔を隠して行つたんだ。匕首までお仲のを持って行つたのさ。丸窓から入ると、主人はお仲が来たと思ひ込んでたぬきねいり狸寝入かなんかやっていたんだらう。そこを飛びついて一と思ひに刺し殺し、ちよつと不動様の剣に血をつけたのはとんだ悪いたずら戯さ。——多分、大垣村右衛門の仏敵呼ばわりを思ひ出しての細工だらう」

「へエ——」

「翌あく朝お仲は、主人の死骸を見ると、てつきり千代松の仕業と思つた。それに丸窓が開いていると、自分の恥にもなるような気がして、丸窓が締つてるように見せかけながら開けた。薄々お三の仕業かも知れないと思つたが、お三の可哀想な身の上も知つていから、できることなら庇かばつてやろうと思つたのさ——そうだらう、お仲。違つているか」

平次の説明を黙つて聴いているお仲は、陶酔にも似た歎賞の眼をあげて、この明智の御用聞に感謝するのでした。

「追っかけてみようか。まだ遠くは行くまい」

立ち上がる千駄木の菊松。

「放っておこうよ、千駄木の親分。あれでも親の敵を討つたに違いないんだ。五両か三兩の借金で親が身を投げて死んだ上、自分は一生奉公させられちや諦めきれまい。——なに、下手人？ 下手人は不動様さ。お上へはそう申上げておくがいい。笹野の旦那に一つ叱られればことが済むよ」

「……………」

「さア引揚げようか」

なんの未練もなく立上がる平次。菊松とガラツ八もそれに従う他はありません。

「幸い誰も聴いていなかったようだ。お仲は今夜のうちに宿元へ帰った方がいいよ。行末の身の振り方は千代松と相談するんだ」

「親分様、ありがとうございます」

大きな感激に身を委ねきつて、お仲は涙の袖に顔を埋めました。

「不動様は洗いきよめてもとの堂へ還すがいい。こんなことになるのもやはり仏様の御利益かも知れないよ。不動様には済まないが、しばらく下手人になって頂くんだ。人助けの

ためだ」

平次は淋しい笑いを残して神田の家へ引揚げました。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（十三） 青い帯」 嶋中文庫、嶋中書店

2005（平成17）年7月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物全集第二十五卷 火の呪ひ」 同光社

1954（昭和29）年5月10日発行

初出：「オール讀物」 文藝春秋社

1942（昭和17）年2月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：noriko saito

2015年12月13日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

銭形平次捕物控

仏敵

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>